

PREVENTION No. 179

平成19年7月19日開催

アルコール問題社員に悩んで

秦野パイプセンター株式会社 廣澤 正子

私の会社は、大手鉄鋼メーカーのGr会社で社員約180名の中小企業です。

とかく鉄の会社は男中心社会で、あいかわらず古い体質がはびこり女性が仕事をしていくには非常に苦勞をすることが多くあります。そういった状況下ということ踏まえて話を聞いていただけると判りやすいかもしれません。

私がアルコール依存症と言う言葉を始めて知ったキッカケは、本家の伯父でした。仕事が手に付かない、提出した書類が受理されないなどが目立つになりました。お酒がないとイライラするので、毎日ウイスキーを家族が買ってくる・・・お酒が切れれば何も手につかないその繰り返しの生活となりました。

そのうち近所、親戚、友人から借金をしていることも発覚して、夜逃げ。

弁護士との話し合いがついたころ、家族から見放された伯父を我が家で引き取ることになりました。

ヤクザが外で見張っている、殺される、お前(母)が皆に悪口をいっているとか、お前が(母が)無理やり仕事をさせる、などと毎日のように騒ぎ、近所の心無い人たちや親戚が、伯父の言葉を信じて忠告にきたり、耐え切れなくなった母の泣き声を奥の部屋で小さくなって聞いていたことを覚えています。

母は、ヤクザが見張っているといわれ、何度も外まで見回りにいったそうです。

そんな地獄のような生活がつづいたころ、突然終わりがやってきました。

伯父の自殺です。

こうしてアルコール依存症という病気は、私にとって憎むべき対象として心に残っていました。

私がアルコール依存症に興味を持ったキッカケになった大きな出来事です。

会社に入ってから2人のアルコール依存症の社員に出会いました。

1人目は協会社からの転籍社員50代後半のAさんです。

お酒大好きで、明るい性格の人ではありましたが、労災で怪我の多い人でした。5年間に4日以上休業災害3回も起こすという困った人です。

ある日のこと、「胸が膨らんで母乳がでたことがある」と私に話しかけてきました。私はビックリしました。

そんなことあるのかしら、と思いながら、そのうち、そんな話は忘れてしまっていました。

その頃に、γ-GTPにかなりの異常が見られました。

当時の産業医は、「お酒はほどほどに」とか「お酒を飲んでもいい薬をあげようか?」とかの指導をするものですから、結果肝臓はみるみる悪化していきました。

再度の面談の後、Aさんは「酒を飲んではいけない会社にはいられないので」と書かれた退職願を提出してきました。

彼がアルコール依存症であったことを気づいたのは、随分後でした。樋口先生の講演を聞きに行き、初めてホルモン異常で母乳が出ることを知りました。衛生管理者として非常に未熟だった私の苦い思い出です。

2人目は親会社からの出向者Bさんです。アルコール依存症で半年間の休職をして、復職してきました。そのころには私も衛生管理者として多少の知識は持つようになっていました。

しかし衛生管理者である私には出向者である彼の健康状態について何も知らされていませんでした。

1年も過ぎた頃、休日出勤した私に、「Bさんが更衣室で苦しんでいる」という連絡がありました。行って

みると真っ赤な顔をして横になっているBさんが更衣室のスノコの上で横になっています。

なにが起きたか分からないままに私の車に乗せ、休日診療所に連れて行きました。

家族へ連絡をとり、治療を待っている間の彼は子供のようでした。声を上げて泣きながら、職場で悔しい思いをした云々を私に抱きつきながら訴え続けます。

そのうちに奥さんが到着、彼を私の胸で抱いたままで、奥さんを見上げて挨拶をするという妙な光景となりました。出勤時に抗酒剤を飲んで通勤時にビールを飲んだ為に呼吸困難になったということは後で知りました。

それから2年後、セクハラ事件が起きました。一方的な思い込みで、派遣社員の女性を傷つけてしまったのです。「彼女を自分が守らなければ、彼女は不幸になる」と職場内に恋人にいる派遣社員の女性にまわりつき、“追いかける、泣く、怒る”などの行為が続きました。

そして、とうとう職場の休憩時間に皆の前で彼女と恋人の事をいやらしい言葉でなじったのです。これは彼の妄想でしかありませんでした。

その後、この事態をどうするかということになりました。

親会社に連絡すると「ちょっと待ってくれ」という返事、アルコール依存の患者として関わってきた社内カウンセラーは、「彼の気持ちを充分聞いてあげて欲しい」とこちらの緊急事態を理解していない様子。

その後も彼の行動はどんどんエスカレートしていきました。とうとう派遣社員の彼女は怖くなって退職。

やっと親会社の幹部が集まったの会議が行われましたが、彼の病気について知識を持っている幹部はほとんどなく、彼の状態を話して分かってもらうのに必死でした。

私からはアルコール依存症はただの酔っ払いではないこと。妄想に走る場合もあること、など私の知っている範囲で説明しました。

結果的には彼を現在の職場から外すことに決定しました。

しかし、この事例は私にとって大変大きなストレスがかかりました。なにしろ相談相手が少なすぎました。

これらの経験をして感じたことは、アルコール依存症は酒好きで困った奴、程度の知識をもっている人が多く、メンタルな病気、死に至る病気という意識がないのが実情だということです。彼の妄想、彼の嘘を真に受け、周りの人をいつの間にか傷つけていることにも気づかないのです。

大きな問題として、親子会社間のコミュニケーション不足、産業医の不勉強、上司の理解不足などが傷口を大きくしてしまったことは間違いないところです。

中小企業ならではの動きとして良かったことは、朝礼や食事時、休憩時間など毎日従業員に声を掛けてきたことにより、早いうちにメンタルチェックに結びつけることが、出来るようになったことだと思います。

うつ病に悩む若手社員も増えている中、少人数の会社だからこその毎日のメンタルチェックも多く、その中で早く気づいてフォローしていく体制が少しずつ出来ていると感じています。朝の挨拶、言葉掛け、ニコリ笑顔をどれだけ見せられるか、が監督職と衛生管理者の重要なポイントです。

実は、今回お話しさせていただくことになり母に伯父のことを初めて聞きました。

母に聞くことは40年以上タブーでした。悲鳴のような母の泣き声が忘れられない私にとって、聞いてはいけないこととして心の奥にしまっていました。

「伯父が小田原駅南口の丘の上から飛び降り自殺をしたこと、ここを通ると、とても辛かった日々を思い出すこと。多額の借金の連帯保証人となっていたこと、伯父からいわれのない悪口を近所にいつまでたっても聞かれ、近所の視線が冷たく感じたこと」など初めて80歳を超えた母の口から聞きました。当時の母の年齢を充分超えた私にとって、衝撃的な過去の事実でした。そこには未だに当時の心の傷が消えていない母がいました。

現在の私にとっては社外のネットワークが大きな力になっており、さらに湘南地区も「メンタル・アルコール関連予防研究会」が今年になってやっと立ち上がりました。

こうした皆様のアドバイスを参考にして、会社としての対応に自信をつけていきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。